

## パーマー (Palmer) 再考 (2)

高井 收

### 1. はじめに

2002年文部科学省は「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想を打ち立てた。そして、新しい高等学校の指導要領には「基本的に英語で教える」ことになっている(金谷 2010)。しかし、英語を外国語とする日本人教師が如何に「英語を英語で」教えてゆくのかはっきりとしたガイドラインが示されている訳ではない。先の言語センター広報第19号(高井 2011)でも書いたが、「英語を英語で」教えるとはどういうことかを考えた時、もう一度パーマーの功績を振り返ってみる時ではないかと思われる。そこから、これからの、日本の英語教育現場における「英語を英語で」教える方法が見えてくる。現在、Communicative Teaching Methodsが注目される中で、パーマーによって紹介されたOral Introductionは多くの日本の英語教育現場において今も実践されている。

この小論では、パーマーのOral Introductionの模範例を中心にして、教職課程の学生の行ったOral Introductionの例と比較しながら分析する。

### 2. Oral Introductionについて

まず、最初にOral Introductionとは何かを考えてみたい。語学教育研究所(1992)によるとOral Introductionは、それによって主に何を提示するかによって、次の2つに分類される。

- (1) story-centeredなもの
- (2) structure-centeredなもの

(1)のOral Introductionは、主として教室で使用するTextの内容を、学習者が理解できると考えられる語彙や易しい文型を使って、基本的には英語で導入することである。(2)の方法は、新出の文型や文法事項を、既習事項との対比(contrast)やパターン(pattern)プラクティスを使って、学習者が習慣的に出来るようになるよう(習慣形成)導入することをいう。一般の教授法解説書では、(1)のstory-centeredなものはPalmerのOral Methodの中の教授法の一つと言われ、(2)のstructure-centeredなものはFriesのOral Approachで行われているとされている。「確かに全体としてはそういう傾向はあるが、現在ではどちらの教授法でも一方だけのOral Introductionをすることは少なくなっている。」(語学教育研究所 1992:2)

特にOral Methodに関していえば、multiple line of approach (Palmer 1921: 568)を唱道していたパーマーが教授法において「あれか、これか」の二者択一的な発想をしているということは考えにくい。彼の他の著書(Palmer 1921)などを読んでみると、特に入門者や初級レベルの学習者に対して、(2)のstructure-centeredな導入方法を紹介していたことが分かる。

入門期や初級レベルでは、structure-centeredなOral Introductionも行われる。しかし、それ以上のレベルでは、story-centeredなOral Introductionが中心になる。この種のOral Introductionのねらいは、

- (1) 英語の音になれさせる
- (2) 学習の雰囲気づくりに役立つ
- (3) 直聞直解の訓練をする
- (4) 直読直解への橋渡しをする

などが考えられる。(語学教育研究所 1992:4)

Oral Introductionへの批判に関しても次の5点が挙げられている。

- (1) 読む前にその内容をすっかり知ってしまったら、読むことの楽しさの大半が失われてしまう。
- (2) 日本人教師のまずい英語を聞かせるのは良くない。そのような英語を聞いてもヒアリングの力は向上しない。ヒアリングの力を伸ばすにはもっと効果的な方法がある。
- (3) Oral Introductionは、教師の一方的な語り・一人芝居でしかない。生徒はもっぱら受け身的な活動しかしない。
- (4) Oral Introductionのあとに行われるTest Questionsは、内容の理解度を測るというより、記憶力をためすものが多い。このため、Oral Introductionを聞くことは生徒にとってかなりの負担になる。
- (5) Oral Introductionを実施するには、教師の側に相当な発話能力が必要であり、また、日常的な準備に時間と動力がかかる。(語学教育研究所 1992:5)

### 3. ホーンビーによるOral Introduction

Oral Introductionは教材の内容を学習者に英語で説明するのが一つの大きな目的である。その時に留意しなければならないのが、英語の世界で学習する雰囲気を作ることである。そうすることにより学習者は英語の音に慣れ、英語の考え方に慣れて行くと考えられる。語学研究所(1992)によるとOral Introductionは英語で説明する内容によって大きく2つに分類される。一つはstory-centeredなもので教材の内容を学習者が理解できると思われる語彙や文型を使って説明し導入することであり、これが、パーマーのOral Methodで行われている。もう一つはstructure-centeredなもので、新しい文型を導入する際に英語を使ってパターン・プラクティスを行う方法で、主にFriesのOral Approachで行われている。しかし、この二つの方法は相反するものではなく、それぞれ、学習者のレベルなど、教える環境によってパーマーのOral Methodでも導入されていると語学研究所(1992)は説明している。ここでは、特にstory-centeredなものを中心に、その方法などを考えて行く。

表1. ホーンビーによるOral Introductionの範例

(片山嘉男・他(1999)『新・英語科教育の研究(改訂版)』大修館書店、pp. 137-138 参照)

#### Text

#### THE BULLET-PROOF JACKET

A man called on the Duke of Wellington and showed him a jacket which he had invented for soldiers, and which, he said, was bullet-proof.

"Oh!" said the Duke, "just put it on."

Then he rang the bell and said to the servant who answered it:

"Tell the captain of the guard to order one of his men to load his rifle and come here."

The inventor disappeared and the Duke never saw him again.

**Oral Introduction to the Story** (イタリック体は新出語句)

I'm going to tell you a story about the Duke of Wellington. He was a famous English soldier. He lived about a hundred years ago.

At that time there was a war between England and France. The Duke of Wellington commanded the English armies. Napoleon commanded the French armies.

One day a man *called on* the Duke of Wellington. He came to see the Duke. He visited the Duke.

This man was an *inventor*. He was a man who invented things. ① Can you tell me the name of a great American inventor? Any one? Yes, Edison was a great American inventor.

This man had invented a jacket. It was a new kind of jacket. It was a jacket for soldiers. The inventor said that the jacket was to be worn by soldier. He showed his jacket to the Duke.

The inventor said that his jacket was *bullet-proof*. He said that it was *proof against* bullets. ② What does that mean? It means that bullets could not pass through it. The jacket would stop bullets. If a soldier was wearing this jacket, he could not be killed. He could not be wounded. The jacket would stop the bullets.

A bullet proof jacket would be very useful to soldiers, wouldn't it? The Duke of Wellington thought so. But he wanted to be certain that the jacket was bullet-proof. So he told the inventor to put the jacket on. (以下省略、語学教育研究所編『英語教授法事典』1962、開拓社、p. 129 ff. 参照)

まず初めに、上の表1に示されたホーンビーによるOral Introductionの範例を見て、Oral Introductionがどのようになされているのか分析してみたい。

このテキストでは一人の男がWellington公爵を訪ねる場面から始まっている。そこで、まず、この話がDuke of Wellingtonの話であることを伝えている。「I'm going to tell you a story about the Duke of Wellington.」聞いている学習者の方はストーリー全体において、Duke of Wellingtonを追ってゆけば話が分かると感じられるはずである。そして、次にDuke of Wellingtonとはどんな人かを、ホーンビーが、2つの短文で学習者にも理解できる単語を使って語っている。「He was a famous English soldier. He lived about a hundred years ago.」ここでは、複文を使わずに短文で2文に分けていることが聞いている学習者全員に対しComprehensible inputになる可能性が高いと言える。

次にDuke of Wellingtonが活躍した時代背景などを3つの短文で紹介している。最初の文ではイベリア半島戦争でイギリスとフランスが戦ったことを述べている。(青山・他 2001参照)

「At that time there was a war between England and France.」Duke of Wellingtonはイギリス軍を率いて、片やフランス軍はナポレオンが指揮していたことを説明している。「The Duke of Wellington commanded the English armies. Napoleon commanded the French armies.」学習者にとって、Wellingtonの名前は余り知られていないかもしれないが、Napoleonならほとんどの学習者が聞いたことのある名前に興味を持たせることができる。学習者は自分が知っている人の名前などが出てくると、そのストーリーの展開に興味を持つものであり、Krashen (Krashen and Terrell 1983)の言う、here and there、すなわち、物語を学習者の身近なものにすることであり、ストーリー全体がComprehensible inputになる可能性が高いと言

える。

さて次のパラグラフでは新出語彙が3文を使って説明されている。まず、Textにある新出語彙「to call on」が含まれた文「One day a man called on the Duke of Wellington.」をそのまま紹介し、次に「come to see」と学習者が理解できる容易な単語で言い換えて説明している。

「He came to see the Duke.」3文目ではそれをさらに別な単語で言い換えることによって、繰り返すことによって重複 (redundancy) の効果を深め、より学習者にとってComprehensible Inputとなる。「He visited the Duke.」特に、新出語彙の導入にはこのredundancyの効果は必要となると考えられる。

次のパラグラフでも新出語彙「inventor」が5つの文で説明されている。ここではinventという動詞は学習者に既習の単語として扱われている。動詞のinventに「～する人」と言う意味をもつ接尾辞-orがついて「発明者」と理解されるわけだが、最初の文でSVCの文型を用いて「inventor」を紹介している。「This man was an inventor.」2番目の文では動詞「invent」を使ってinventorが「発明者」であることを説明している。「He was a man who invented things.」さらに、学習者の興味を持続させるために、話題を学習者も知っている有名な人物に例をとり、質問をしている。「Can you tell me the name of a great American inventor?」4番目の文では学習者にさらに応えることを促している。「Any one?」ここでは、アイ・コンタクトなどを使えば、学習者全員というよりも、1人ひとりからの答えを促すことができる。最後の文では学習者から解答が得られても、得られなくても使える文で、学習者から解答があれば、繰り返し、確認の為に使える。「Yes, Edison was a great American inventor.」学習者がわかっている場合や、時間の都合などで先に進めたいときにも、このように、教師は自分で確認をとって次に進むことができる。

さて、話題は次にjacketに移る。5つの文でこのjacketについて説明している。先のパラグラフではこの男がinventorであること。そして、新出語彙のinventorを説明したわけであるが、ここでは最初の文で、何をinventしたかを述べjacketの話題に入っている。「This man had invented a jacket.」そして、次の文でinventという単語の内容をやさしい言い方で「そのjacketが新しく発明されたものである」と説明し、新出語彙の意味を更に繰り返し説明している。「It was a new kind of jacket.」ここでもinventを説明する為のredundancyを上手く使っている。これによって更に学習者全員に内容がより分かりやすくなると考えられる。

次の3文では文型に焦点が置かれているように思われる。Story-centeredである中で、Structure-centeredなものが導入されている。その説明の方法は、まず最初の文で意味内容を学習者に理解させ、次の文でもう少し複雑な文型（新しい文型：受動態の不定詞）を使って同じ内容を説明している。「It was a jacket for soldiers. The inventor said that the jacket was to be worn by soldier.」そして、3文目は、Textでは「showed him a jacket」とSVOOの文型をとっているが、直接目的語のhis jacketを動詞の直後に置くことによって、「to the Duke」と間接目的語は「to」を取ることを示している。「He showed his jacket to the Duke.」文法を説明するのではなく、使って示すことの大切さがよくわかる。このように、Oral Introductionでは文型を説明するより、意味内容に焦点を置き、使って見せることが大切である。

次のパラグラフは新出語彙の合成語bullet-proofについて意味内容を説明している。まず、合成語のbullet-proofが形容詞として使われていることをTextに出てくるSVCの文型で紹介し、2番目の文では、合成される前の2つの単語を使って説明している。「The inventor said that his

jacked was bullet-proof. He said that it was proof against bullets.]

次に自問自答のようにbullet-proofの意味内容を問いかけている。「What does that mean?」そして、次の5文でその同じような内容について焦点を変えて、各文で言い換えている。最初の文ではbulletsに焦点をあて、「弾丸が突き抜けないこと：It means that bullets could not pass through it.」と表現し、次ではjacketに焦点を当て、「防弾チョッキが弾丸を止める：The jacket would stop bullets.」と言い、次には「それを身につけた兵士は死ぬことは無い：If a soldier was wearing this jacket, he could not be killed.」と兵士に焦点を当てている。また、「その兵士は傷も負わないだろう：He could not be wounded.」と防弾チョッキの特徴を説明している。最後にjacketに焦点を当て、パラグラフをまとめている。「The jacket would stop the bullets.」

最後のパラグラフではそれまでに述べたbullet-proof jacketについて、反語を使って学習者に同意を求めることによって学習者の注意を引きつけようとしている。「A bullet proof jacket would be very useful to soldiers, wouldn't it?」そして、ここではDuke of Wellingtonとinventorとのやり取りからユーモアが理解できるように、Duke of Wellingtonの心理描写も加えて、このinventorがなぜ逃げてしまったかをtextとは別な言い方で丁寧に説明している。「The Duke of Wellington thought so. But he wanted to be certain that the jacket was bullet-proof. So he told the inventor to put the jacket on.」

このホーンビーの範例からOral Introductionの特徴を整理してみると次のようになる。

1. 短文を使って繰り返し説明する。
2. 何回も繰り返し出来るだけ同じ文型を使う。
3. 学習者が理解できる平易な語彙を使う。
4. 新出語彙の導入には言い方を変えて (パラフレーズをして)、何回も使う。
5. 内容に関してはエジソンなど学習者も知っている有名な人物や事柄(学習者の理解できる)を例に出す。
6. 内容を質問形式で問いかけ、学習者の理解を確認しながら説明する。こうすることによって授業が学習者参加型のInteractiveな授業展開ができる。
7. 新しい文型を導入する際には文法事項の説明ではなく意味内容に焦点を置いて、その文型を様々な角度から使って見せる。

#### 4. 教職の学生のOral Introduction

それでは、教職を履修している学生のOral Introductionの例(表3参照)をホーンビーによるOral Introductionの範例と比較分析してみる。それぞれの例は表2のTextに基づいて授業の中でOral Introductionの練習をしたものである。

#### 表2. Text

(宮川・幸久・他4名(1995). 『ONE WORLD English Course Ⅰ』東京：教育出版株式会社, p. 73 参照)

#### Lesson 8

#### Japanese Culture from Foreign Eyes

We often think that we know our own culture better than foreigners do. But there are a number of things whose *significance* foreigners know far better than we do. It is sometimes necessary to look at our traditional culture from foreign eyes and know ourselves better.

**Ombu**

The custom of carrying a baby on one's back in Japan *probably developed* as much out of *necessity* as *motherly* love. A woman in *former generations* had a lot of children and too much work to look after them all. By *strapping* a baby *onto* her back, she could *prevent unlucky accidents* and free her hands for *housework* and *shopping*. (イタリックは新出語句)

表3.

Oral Introduction 例 : Student A

Hello everyone! How are you today? Today's lesson is chapter 8, 'Japanese culture from foreign eyes'.

At first, please look at this picture. Do you know what are they doing? Yes, they are doing 'Ombu'. A few decades ago, to carry a baby on one's back, to do Ombu was a natural act for mothers who have children. Also, they had a lot of children, and had to work to look after them. All of mothers were so busy then. At that time, 'Ombu' became popular among mothers because they had to do many things over looking after their children. So, Let's start reading the text, and understand why 'Ombu' had become so popular among mothers in those days!

最初のパラグラフは挨拶と課題の紹介をしている。「Hello everyone! How are you today? Today's lesson is chapter 8, 'Japanese culture from foreign eyes'.」次に教科書にある絵に注目し、トピックが「おんぶ」であることを学習者に気づかせている。「At first, please look at this picture. Do you know what are they doing? Yes, they are doing 'Ombu'.」絵の利用は学習者の理解を助け、Comprehensible inputとなる。次の文では不定詞を並べることによって「おんぶ」の仕方を説明しようとしている。「A few decades ago, to carry a baby on one's back, to do Ombu was a natural act for mothers who have children.」そして、次に「おんぶ」がどうして必要になったかを説明し、「Also, they had a lot of children, and had to work to look after them. All of mothers were so busy then.」どうして「おんぶ」がポピュラーになっていったのかを説明している。「At that time, 'Ombu' became popular among mothers because they had to do many things over looking after their children.」そして、Textのリーディングに入っている。

ホーンビーの範例と比較すると、student Aの例ではトピックを学習者に質問形式で問いかけ、絵で理解を促している。範例と同じように、学習者に質問をすることによって、Interactiveな授業形態を取ろうとしていることが分かる。範例では学習者がよく知っている事柄を例にしているが、このように絵を例にとることもComprehensible Inputの効果を高めることになる。

しかし、範例と比べると、新出語句の導入が行われていないことと、全体的に意味内容について短文を使って、もう少し丁寧に学習者に説明すべきである。学習者の目線に立ったOral Introductionが望まれる。

## 5. おわりに

パーマーのOral Introductionはホーンビーの範例を見ると、(2)学習者の英語のレベルに合わせた語彙を使い、(2)短文で内容を繰り返し説明している。特に、(3)新出語彙の導入には別な言

い方にパラフレーズをし、(4)学習者にとって身近な例を使って説明している。そして、(5)新しい文型を導入する場合には意味内容に焦点を置き、その文型を様々な例を用いて使用して見せている。Student A の場合には絵を用いて同じような工夫をしている。また、両者とも学習者に質問を投げかけることによって授業をInteractiveにしている。こうして見てみると、Oral Introductionの教授法は現在の第2言語習得理論 (Krashen and Terrell 1983) に基づいた Communicative Teaching Method と共通するものが多くみられる。

ホーンビーの範例では教師が英語のネイティブ・スピーカーであることもあり、すべて英語で説明しているが、教職の学生や日本人がOral Introductionを用いる場合には、Code - switchingの技法を使い、学習者に合わせて、適宜、母語である日本語を使うのもパーマーの提唱するOral Methodの教授法から離れているとは考えられない。この点に関しては今後、日本人教師が研究して行かなければならない課題である。

### 参考文献

Krashen, S. and Terrell, T.D. (1983). *The Natural Approach*. Oxford: Pergamon

Palmer H. E. (1921). *The Oral Method of Teaching Languages*. London: George

G. Harrap & Company Ltd. In 語学教育研究書編 (1995). 『パーマー選集 第1巻 理論編1』東京:本の友社

\_\_\_\_\_ (1921). *The Principles of Language-Study*. London: George G.

Harrap & Company Ltd. In 語学教育研究書編 (1995). 『パーマー選集 第1巻 理論編1』東京:本の友社

青山 吉信・石橋秀雄・木村靖二・武本竹生・松浦高嶺 (2001). 『世界史大年表』東京:山川出版社

片山 嘉男・他 (1999) 『新・英語科教育の研究 (改訂版)』東京:大修館書店

金谷 憲 (2010). 「新学習指導要領」. 『英語教育』Vol. 59. No. 8. 東京:大修館書店

語学教育研究所 (1992). 『英語指導技術再検討』東京:大修館書店

高井 収 (2011). 「パーマー (Palmer) 再考 (1)」。『言語センター広報』No.19. 小樽:小樽商科大学言語センター

宮川 幸久・他4名 (1995). 『ONE WORLD English Course』東京:教育出版株式会社